

～寄付の掛物～

中京の画人

1. 青木 浦堂（あおき ほどう）1810～1872（文化7年～明治5年）【南画】

出生地 名古屋大船町 通称 知多屋庄次郎

塩問屋松良の次子、西萬寺町（西区皆戸町）に新居を構え、酒造を業とした。生まれつき画を好み、山本梅逸の門に入って多年習熟し、師法を体して専門画家をしのぎ、遂に梅逸と分かちがたきまでに至った。

2. 伊豆原麻谷（いずはら まこく）1778～1860（安永7年～万延元年）【南画】

出生地 西加茂郡筋生村（三好町） 通称 橘蔵

大工喜六の三男、十才の時名古屋に来て曹洞宗の僧となったが常に画を描き還俗して長崎に遊び、清人方西園・費晴湖に学んだ。のち京に出て松谷と号し、竹洞・梅逸と歳寒三友の一人として画名をあげた。画は気韻を尚び、俗人には喜ばれず、わずかに具眼の士に称された。

3. 岡本 硯農（おかもと けんのう）1849～1923（嘉永2年～大正12年）

出生地 名古屋市中区南久屋町 通称 久敬

木村金秋に土佐派の画法をうけ、山菊を得意とした。のち来朝した清人胡鉄梅から南画を学び、各地に随行して研鑽し、文人画を描くかわら顔料調整の法を修め、自ら製造して用いた。

4. 奥村 石蘭（おくむら せきらん）1834～1897（天保5年～明治28年）【四条派】

出生地 名古屋市白山町 通称 源吾、大助

尾張藩士奥村佐平の男、13才の時野村玉溪の門に入り四条派の画を学びのち京都に出て横山清暉に従い研鑽すること数年で名古屋に帰り画を業とした。葦原眉山と同好社を設立して社長となり流派を超えて画界の発展を謀った。

5. 小田切春江（おだぎり しゅんこう）1810～1888（文化7年～明治21年）【浮世絵派】

出生地 名古屋市久屋町大下行留り 通称 伝之丞

尾張藩士小田切忠政の長男。はじめ画を高力種信の門に入り、実景写生の妙を得、さらに森高雅に学んで土佐派を修め、浮世絵風の風俗画に巧みであった。

6. 亀井 半二（かめい はんじ）1801～1855（享和元年～嘉永4年）

玉堂、又は石華と号す。陶工に秀でており、古作を模倣する事に妙を得ているし、画は初め森高雅に学び、後に山本梅逸の門に入る。

7. 川合 玉堂（かわい ぎょくどう）1873～1957（明治6年～昭和32年）

出生地 葉栗郡外割田村（木曽川町） 通称 芳三郎

はじめ京都に出て幸野樸領に師事のち東京に移り橋本雅邦の門に学び狩野派に四条派の画風を加味し、写生を基礎として風景画に独自の領域を開拓。文展審査員となり官展に活躍。

8. 鬼頭 道恭（きとう どうきょう）1840～1904（天保 11 年～明治 37 年）【土佐派】

出生地 名古屋本町 通称 玉三郎

平八の子、森高雅につき、のち京都に上り、巨勢派の北村挙隆に仏画を学び、かたわら冷泉為恭について土佐派を修めた。内国絵画共進会に受賞、仏画が得意で、その第一人者となった。

9. 喜田 華堂（きだ かどう）1802～1879（享和 2 年～明治 12 年）【岸派】

出生地 岐阜県不破郡今須

若くして京都に遊び、画を岸駒および岸良に学ぶ。その後東国に遊歴し名勝旧跡をたずね、文人墨客と交わる。清廉風雅な生活を愛し、画は気韻があって高雅、特に桜花に巧みで名声高く藩の御絵師となる。

10. 木村 金秋（きむら きんしゅう）1833～1917（天保 4 年～大正 6 年）【土佐派】

出生地 名古屋山神町 通称 鯨吉

尾張藩士橋本義俊の第四子、木村喜蔵の家を嗣ぐ。森高雅に土佐派の画法をうけ、日比野白圭と競い、古画を臨模研究し、特に信実・訥言に私淑して一家をなした。葦原眉山、小田切春江、奥村石蘭らと同好社を組織し後進の指導にあたった。

11. 久保田米僊（くぼた べいせん）1852～1906（嘉永 5 年～明治 39 年）【米僊派】

出生地 京都

鈴木百年の薫陶を受け一派を開き、さらに幸野棹領と京都に画学校を設立した。明治 19 年（1886）に絵画共進会が愛知県に開催された時、審査委員となり名古屋に来た。

12. 月 僊（げっせん）1741～1809（寛保元年～文化 6 年）【円山派】

出生地 名古屋蛸屋町

味噌商彦八の子、幼より画を好み、七才にして宝町円輪寺に得度、一度家に帰されのち江戸増上寺に寓し、雪舟派の桜井雪館に学び、京に上り円山応挙に画法を問い奥儀をきわめた。

13. 豪 潮（ごうちょう）1749～1835（寛永 2 年～天保 6 年）

出生地 肥後玉名郡山下村 名 寛海 字 快潮

天台宗の僧、柳原長栄寺開山。文化 14 年春、名古屋に来る。独特の画法に、墨汁薄く、偉僧の揮毫たることは画筆によくうかがえる。

14. 高田太郎庵（たかだ たろうあん；良斎）1684～1763（貞享元年～宝暦 13 年）【狩野派】

出生地 名古屋住吉町 通称 藪下屋太兵衛

家は世々飼馬を業とした。画は清野養山に学びのち狩野常信についた。画は脱俗超凡で世人の称賛をうけた。しかし茶人太郎庵の名はそれ以上に有名である。

15. 田中 訥言（たなか とつげん）1767～1823（明和 4 年～文政 6 年）【土佐派】

出生地 名古屋 名 痴

画を土佐光貞の門に入って学び、さらに藤原信実、春日光長の画巻を研究し古土佐の復興を唱えた。花鳥山水いずれにもすぐれまた有職故実にも詳しくその考証を極めて後世の亀鑑と称された。寛政二年(1790)の御所造営の際には内裏の障壁を画いた。のち眼をわずらい、舌を嚙んで死んだという。

16. 中川 麦林（なかがわ ばくりん）1675～1739（延宝 3 年～元文 4 年）

出生地 伊勢川崎 通称 喜右衛門

材木商であったが、のち神宮の御師となる。芭蕉晩年の門人である。俳諧のほかに絵画を善くした。

17. 中林 竹溪（なかばやし ちっけい）1816～1867（文化 13 年～慶応 3 年）【南画】

出生地 京都 名 成業

画を父の竹洞に学び、一時山本梅逸の教えをうけ、真景を写すのに努めた。しかしすぐれた才能を持ちながら片意地で協調性がなく世に入れられなかったようである。

18. 西村 清狂（にしむら せいきょう）1727～1794（享保 12 年～寛政 6 年）【南画】

出生地 名古屋御園町 通称 鱧屋(やすりや)清兵衛

幼より画を好み師家なくして自ら南画に一機軸を出し、内藤東甫と共に江戸にまでその名を知られる。画は小景の山水および人物が得意。

19. 丹羽 花南（にわ かなん）1846～1878（弘化 3 年～明治 11 年）

尾張藩士丹羽閑斎の子、伯父高木義雄に剣道、近藤喜八郎に槍術、外祖高木雪居に絵画、松本奎堂に経書を学ぶ。

20. 沼田 荷舟（ぬまた かしゅう）1838～1901（天保 9 年～明治 34 年）【浮世絵派】

名古屋市東区水筒先町にて歿

月斎の孫、幼より画を祖父に学びもっとも花鳥に長じた。「花舟花鳥画譜」の著がある。

21. 日比野白圭（ひびの はっけい）1825～1914（文政 8 年～大正 3 年）【土佐派】

尾張藩士間瀬伝蔵の次男で日比野氏の養嗣となる。はじめ画を竹田景甫に学びついで鈴村景山の門に入り、さらに森高雅に従って土佐派を修めたが師法のみを墨守せず諸派の長をとって遂に一家をなした。もっとも人物が得意で木村金秋と並び称された。

22. 平沢 九郎（ひらさわ くろう）1772～1840（安永元年～天保 11 年）

茶友に小堀宗中、松尾宗五らあり、茶室を今昔庵と名づける。

23. 風花翁雲阿（ふうかおう うんあ）1806～1880（文化3年～明治13年）【南画】

出生地 名古屋 通称 円龍

東照宮別当尊寿院十六世で、維新後は上月与那と名のり、祠官となった。書画、詩歌狂句の類より彫刻、陶器、茶器などの技に至るまで心得ていた器量人で、耽古連八天狗の一人、画は山本梅逸に学び、のち日根野対山に山水を問うた。

24. 細井 平洲（ほそい へいしゅう）1728～1801（享保13年～享和元年）

出生地 知多郡平島 名 徳民

晩年尾張藩士に召され儒者として庶民を教化した。南画の筆格とも狩野派だともいわれている。山水画には必ず詩をもって記す。

25. 森 高雅（もり たかまさ）1791～1864（寛政3年～元治元年）【土佐派】

出生地 名古屋鉄砲町 通称 石門

伊藤圭介・沢田眉山と同じ寺子屋に学ぶ。画をはじめ吉川一溪について狩野派をうけ、ついで中林竹洞に南画を、また牧墨僊に浮世絵婦人画を学んで声価をあげた。晩年土佐光貞の門に入り、古土佐の遺風を慕い、有職故実の学をきわめ大和絵を加美した風俗画に妙を発揮した。画は艶麗にして温雅、みずから工夫案出して鳥獣人物が得意。

26. 森村 宜稲（もりむら よしね）1871～1938（明治4年～昭和13年）【土佐派】

出生地 名古屋市中区梅園町 通称 悌二

尾張藩の儒者森村宜民の次子、はじめ木村雲溪、奥村石蘭の門に入り四条派を、のち土佐派に転じて木村金秋・日比野白圭に大和絵を学び、歴史画および花鳥風景に独自の画境を開き、構図の清新と筆致彩色の優雅典麗は好事家の称賛するところ、文展入選をはじめ官私の展覧会に力作を発表。稲香画塾を開き多数の門人を教え中京画壇のため尽くした。

27. 横井 金谷（よこい きんこく）1761～1832（宝暦11年～天保3年）【俳画】

近江栗太郡下笠村の工人小浜の子で、九才の時僧となる。画を蕪村に学び、とくに山水をよくした。改宗して修験僧となって諸方に行脚。年四十をすぎてはじめて名古屋にきて信吉町大宝院に入って修験となる。年六十にならんとする時去って三河に赴き大心寺に住し、文政三年（1820年）加茂郡金谷村福満寺で法然上人一代記を描く。

28. 横井 也有（よこい やゆう）1702～1783（元禄15年～天明3年）

出生地 名古屋 幼名 辰之丞、長じて市郎平

尾張藩横井時衡の子、画風は内藤東甫に似ている。四通八達であるが特筆すべきは俳文である。趣味の広汎なことは蜀山人に似ているが、彼の如く放縦ではない。極めて上品な滑稽で世慣れた人であった。

29. 渡辺 清（わたなべ きよし）1778～1861（宝暦元年～文久元年）【土佐派】

出生地 名古屋本町 通称 幼名 囃吉のち大助

縫箔を業とする利平の子、画をはじめ吉川英信・一溪について狩野派の画法を受け、のち京都に出て田中訥言・土佐光貞について大和絵を学ぶ。数年にして名古屋に帰り、長者町二丁目に住んで、繊細秀麗な筆致と彩色の巧妙および卓越した意匠で世に知られ、いわゆる名古屋土佐の発達につくした。

30. 山田 秋衛（やまだ あきえ）1888～1968（明治21年～昭和43年）

出生地 名古屋市中区飴屋町

画をはじめ服部石仙に師事、のち松岡映丘の門に入り大和絵を学び、画を業とした。また独学で郷土史を研究し名古屋市文化財調査員および愛知県文化財専門委員として、古美術の鑑定など、文化財行政に協力し、のち名古屋市文化財調査委員長となった。

（以上、淡交会名古屋支部青年部茶会時の資料による）

<補>

31. 内藤 東甫（ないとう とうほ）1728～1788（享保13年～天明8年）

出生地 名古屋 通称 浅右衛門

尾張名古屋藩士。狩野派の絵をよくし、横井也有と合作した。書、歌にもすぐれる。

32. 松野 梅山（まつの ばいざん）1783～1857（天明3年～安政4年）

出生地 尾張 名 栄興

尾張の常満寺、美濃の常導寺に住み、法眼(ほうげん)になる。仏画、花鳥獣画を得意とした。

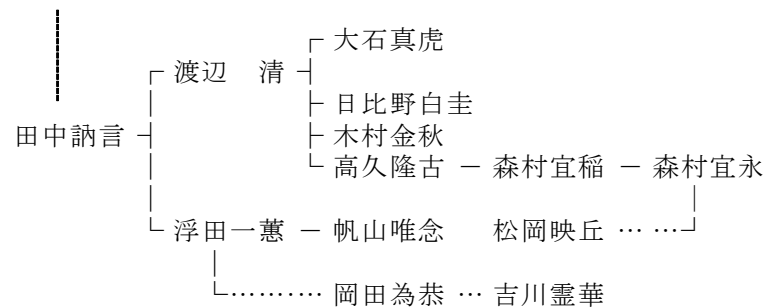
33. 山本 梅逸（やまもと ばいいつ）1783～1856（天明3年～安政3年）【南画】

出生地 名古屋 名 親亮

名古屋の彫刻師の家に生まれ、はじめ画を山田宮常らに学び、豪商の神谷天遊の庇護のもと同家所蔵の古画を模写し研鑽をつむ。やがて中林竹洞と共に京都を本拠として各地を歴訪。晩年は名古屋に帰り、藩の御絵師格となり士分になる。花鳥画を得意とした。

【資料】復古大和絵系画家 系図 （系図は森村記念館の揭示額による）

土佐光貞 — 土佐光孚



<注>

- ・土佐光貞（とさみつさだ） 土佐光芳の次男。文化3年（1806）歿、69才。
- ・土佐光孚（とさみつざね） 光貞の長子。嘉永5年（1852）歿、73才。
- ・田中訥言（たなかとつげん） 京都生（一説に名古屋生）。文政6年（1823）歿、57才。
- ・渡辺 清（わたなべきよし） 名古屋生。文久元年（1861）歿、84才。
- ・浮田一蕙（うきたいっけい） 京都生。安政の大獄に連座。安政6年（1859）歿、65才。
- ・大石真虎（おおいしまとら） 名古屋生。天保4年（1833）歿。41才。
- ・日比野白圭（ひびのはっけい） 名古屋生。大正3年（1914）歿、90才。
- ・木村金秋（きむらきんしゅう） 尾張藩士橋本義俊の第四子。大正6年（1917）歿、85才。
- ・高久隆古（たかくりゅうこ） 奥州白河生。安政5年（1858）歿、59才。
- ・帆山(花乃舎)唯念（ほやま(はなのや)ゆいねん） 伊勢桑名生。明治27年（1894）歿、72才。
- ・岡田(冷泉)為恭（おかだ(れいぜい)ためちか） 狩野永泰の子。元治元年（1864）歿、42才。
なお、冷泉姓は本人が勝手に名乗ったもの。
- ・森村宜稲（もりむらよしね） 名古屋生。昭和13年（1938）歿、68才。
- ・森村宜永（もりむらよしなが） 名古屋生。森村宜稲の子。昭和63年（1988）歿、81才。
- ・松岡映丘（まつおかえいきゅう） 兵庫県生。兄は国文学者井上通泰・民俗学者柳田国男・言語学者松岡静男。昭和13年（1938）歿、58才。
- ・吉川靈華（きっかわれいか） 東京生。昭和4年（1929）歿、55才。

■徳川美術館 平成26年(2014)秋季特別展 10月4日(土)～11月9日(日)

「復古やまと絵 新たなる王朝美の世界～訥言・一蕙・為恭・清～」